

果てしない青

愛知県

青山 勇樹

読みかけの本に葉をはさんだような午後
窓からツェルニーの練習曲が聞こえる
指遣いが難しかったことは
たしかに覚えているけれど
今はもうすっかり弾けない
たくさんのことを忘れているのに
ずいぶん賢くなったつもりでいたと
本を閉じて明るい空を見あげる
二万年前も
こんなまぶしい青だったのかしら
昨日の空もよく覚えていないのに
明日の天気ばかり気にしている
なにかを思い出すとき
いつも忘れていたことに気がつく
それはすこし恥ずかしいから
懐かしいなどつぶやいてみる
記憶がなぜか寂しげなのは
恥ずかしさに耐えているのかもしれない
どこからきて
どこへいくのか
そんなことを考えてみる
果てしない青にこんなにも焦がれるのは
いつかきつと
そこへ還っていくからだろう
あの高みへと
いのちが生まれたところへと
おそらく姿を変えながら
いのちはいくたびも生まれかわる

終わることのない愛と死を
くりかえしくりかえしたしかめようと
いまくりかえされているのは
弾きにくいパッセージなのだろう
そのたびに
一小節だけ巻きもどされる
どうしても忘れたくない出来事を
いつまでも覚えておこうとするように

やがて

ツエルニーはなめらかに進みはじめ
甘やかな匂いを連れてくる
バナエッセンスとメープルシロップ
パンケーキが焼きあがったにちがいない
まもなくメロディの代わりに
はしゃいだ声が呼びにくる
それまでにせめて今日の空の青のことを
心に刻みつけておこう
なにげない晴れた午後のことを
大切なひとたちの
ありふれた笑顔のことを
たとえそれが
思い出になっちゃったとしても
恥ずかしさに頬を染めながら
懐かしいなどつぶやいてみよう
そうしてそれから
ありがとうのひとことを

藍の一生

岐阜県

中原 賢治

藍染めの死に装束をまとい
乳白色の笑みが零れそうな祖母が
蠟燭の炎がたどる宿命に
真つ赤な夕陽に染まった火葬場
この世の色彩は染料で作られているのか
わずか十歳で紺屋に奉公し
ひらがなの文字すらおぼえぬまま
藍染めの鬼女と世間に呼んだ
八十九歳の生涯のなか
病児を持つ母親の哀しみを捨て
止むに止まれぬ技を伝える
己ひとりに秘めた執念が
白内障の患いを隠し
地べたを這いずり藍の若芽を
我が子のように撫でる姿に
父が嫉妬し続けた日記が残された
藍を建て 藍を染め 藍を守る
朝夕 静かに藍甕に櫂を入れ攪拌する
空気に触れる瞬間
鮮烈な緑から 涼しく深い藍の色へ
おずおずと最初に鍋底へ入れる
張り渡し絹布は純白
無我に入る一歩手前
祖母は狂気をおびた鬼になる
あとは一気呵成に魂を失い
祖母の白髪が透明になっていく
石臼をひくずる暮らしに
藍は決して応えようとはしない
ただ 紺瑠璃の美しさをたたえる藍の
艶々とした香りに
祖母は生きる全てを捧げたかもしれない
この国のすべての女たちへ
美しい藍の色合いに飾りたい

迷蝶

青森県

竹津健太郎

深い温もりの底で

あなたは身を起こすことができない

このままでいたいのか

動きたいのかも判然としない

どこかを歩いてきたようにおもうのだけれど

すれ違ってきたものの顔を

まるで記憶していないようだ

それはきつと

覚えるほどのものではなかった

温みの底から蔓が生え

あなたの体に巻きついていく

胴も、手足も

まわりつく蔓に締めつけられて

あなたはいよいよ軋みはじめる

からんだ相手が倒れれば

蔓植物もまた倒れる

だから締めつけは

どこか計算ずくだ

静かで長い、退屈な生存競争の果てに

あなたはいつしか肉を失い

蔓が骨を舐めまわす

眼窩から突きでる蔓の先端が

あなたよりも高い場所を探して

右へ、左へと

身をよじる

あなたは達観して

蔓を自分の肉のようにおもうかもしれない

蔓の先端で揺らめく
黒く縁取られた羽根
その蝶は渡りの最中で
迷える蔓に身を預けて
束の間の休息をとっているところだ
個体の生存期間は
片道の移動期間よりも短いほんの数ヶ月
世代を越えて渡りをつづける
目的地を見たもののない蝶の群れは
いったいどうやって
渡りを次代に伝えているのだろうか

郵便受けが音を立て
あなたは息を吹き返す
朝が来て、夜が終わる
またすこし
あなたは北上したようだ

(和歌山県知事賞)

橋

香川 県

明石 旅夫

昭和十九年一月、台湾海峡で輸送船が撃沈された。父死去の報せは蠟梅の香る庭先で母に渡された。紙片を手に彫像の母は動かず夕陽に長い影を作らせていた。勤勉で闊達だった母。紙片一枚が母を崩し始めた。「父チャンは戻ってこん、待つ人がおらんようになった」

空ろな視線を宙に泳がせ呟く母。畑の中で案山子になった母が呟く。かまどの脇から力の失せた眼で繰り返す呪文の呟き。母の心の裂孔は拡がり、深い海溝から湧き上がる哀しみと喪失感、自失の海で錯乱する母を、七歳の私はただ凝視^{みつめ}していた。私は父を知らなかった。父の存在は遠く、実像が心に形成されていなかったから、父の死の波動も私を直撃することではなく母と二人の日常が変りなく続いていくと思っていた。だが、母は違った。呟きの頻度を詰めながら三ヶ月が過ぎ、夜が更けて母が出かけるのを知った。完璧だった母の変容、脅えと疑念が純白の和紙の上に落ちた一滴の血となって、滲みの輪郭を広げていく。戸惑いの淵に溺れつつ耐えた。蒲団を被って身を縮め、夜明けを待ち乍ら、疲れて眠りに落ちた。

長い梅雨ながせに入った。暗い雨の中へ傘を持たずに出ていく母を見つけてとび起き、後を追った。裸足の母は濡れ乍らとぼとぼ歩いて、大川に架かる橋の中ほどまでたどり着いた。木の欄干に両手を突いて水嵩の増した濁流の川面をじいっと見つめている。母チャン！、叫んで走り寄った。気付いた母が向き直って両手を拡げた。両腕に私を抱き込み、震える遠い声で「一緒に父チャンのそこへ行こうか」と、問いかけてきた。私はうろたえ、咄嗟に「父チャンどこに居るか分からんと、答えた。全身から搾り出す母の声が「そうやね」と辛そうに呻き、更に間が開いてから、「ごめんね」と普段の母の声が下りてきた。私は声をあげて、母にしがみつき、泣いた。私の背中を優しくさすり乍ら、「戦争はようけ殺した方が勝ちじゃね」。母の声は、降りしきる梅雨の雨に冷え切っていた。

五十年が過ぎて、再び橋の上に立った。心に厳しく封印してきた母との約束を、穏やかな春陽の橋へ解き放つために訪れた。「母チャンの側へ行ってもええか」呟き乍ら見下すと、広い川原の中ほどを瘦せた水路が小川のように流れている。吠えたて威嚇していた濁流は、はるかな時間ときの彼方へ去っていた。

黄金風景

栃木県

細島 裕次

たたなづく棚田の畦に、老婆と老爺が、静かに坐っている。枯木に、灰色の帯が、干してあつて、蒼ざめている。よく見れば、蛇の脱け殻が、木に這うように懸^かつていて、その頭が、白い雲の端に溶けている。

春は、光の馬車に乗ってやってくる。峠の道祖神の、男と女が、苦しげに歎^{なげ}びに軀をよじりながら、目交^{まぐわ}っている。梅が咲いて、的皦^{てきせき}と輝いている。経読鳥の、翡翠の鳴き声が、萌えいずる若葉の谿を深うして、ひねもす長閑な時が、水飴のように溶けて、伸びてゆく。

赤錆の虚しく沈澱している田圃で、虫けらのごとく這いずり回った百姓が、種籾まで喰い潰した貧窮の果てに、木で首をくくって、みのむしのように冷たく風に吹かれていたふたりが、紫の雲のたたなづく棚田の畦で、春陽を浴びて、微笑んでいる。いかさまのこの世を、さかさまにして。

秋の日が沈みゆくひととき、明るく透徹した極みの日射しが、しぐれるように暗い山膚に降りそそぐと、いづれかたちもなく朽ちて玄となる落葉が、あまさず光を吸い取って、汚辱にまみれたこの世を黄金にかがやかす。

どこかで、釣瓶落としての光芒のなかで、チチヨ、乳ヨと泣く声（みのむしなのか）、ひとしきりした。その後は、あやめもわからぬ闇が、黄泉比良坂から、霧のように這ってくる。

（日本現代詩人会会長賞）

こころに立つ

新潟県 高田 一葉

近所の子 親類の子
四、五人も集まれば

“あつたてんがな”と

ばあちゃんの話は始まった

お日様があつて田んぼがあつて

この町には角田山ってお山が

あつたてんが

ばあちゃんの話はいつだつてそこから始まる

角田山から吹く風をすーつと吸つて

さて ある日

下町の姉さが仁箇にかの村へな と続けば

ああ あそこか と子らには分かる

山懐のその村と青田に浮かぶこの町と

渡る風の匂いまで

そこを姉さが泣き泣き歩いてたとなれば

昨日走つたあの一本道を

ぞろぞろついて歩きながら なあして？

なあしてら？ とばあちゃんの方を振り返る

そいはな…ともつたいをつけた後

ばあにも分からん そういうこつたから と

それはばあちゃんの得意文句

分からんことは分からんまんま

お山のどこかに置き去りにして

そういうこつたからと話はどうどん先へ行き

働き者の姉さは

今じゃ丸屋の奥さんらてえ

えーっと 子らは大騒ぎ

けんちゃんけんちゃんの母ちゃん母ちゃんのことらいや

ばあちゃんの話はいつだつて

めでたしめでたし どんとはらい

ばあちゃんから貰った十円銅貨を握って
駆け出す町のどこからも
角田山は見えていた

“そういうこったから”と
ばあちゃんどころか
誰もが生まれるずっと前から
そういうこったからあった　ここ

お日様があって
田んぼがあって
お山があって
ここにあるっていうことが
風みたいに流れてる

(日本詩人クラブ会長賞)